JAPAN HONG KONG

飛 FLYING DRAGON 龍

日本香港協会ニュース ……No.57

1993年～1997年　康樂街（別名／雀仔街・バードストリート）
もっとも賑やかな頃のバードストリート

2007年　香港返還10年目の旺角（バードストリートの跡地）
ヤングカルチャーの発信地として生まれ変わった街

「香港雀仔街」生まれ変わった街

今年7月は香港が中国の特別行政区となって歩み始め、10周年を迎えました。返還直後にはアジア通貨危機に見舞われ、香港の不動産価格は大暴落し失業率が上昇。また2003年にはSARSの流行で経済が大打撃を受けるなど、この10年間は香港にとって波瀾に富んだ年月でした。九龍半島・旺角に位置する「康樂街」(別名・雀仔街／バードストリート)の移り変わりは、返還とともに獅子から龍へと脱皮するかのように、生まれ変わっていく香港と重なって見えてきます。時代遅れといえる雀仔街の古い街並みが、歴史の大きなうねりの中で生まれ変わっていきました。

1993年から2007年の15年間、雀仔街の移り変わりを撮り続け、返還10周年を記念して、写真集**「香港雀仔街」生まれ変わった街**を出版。旧雀仔街は旺角の東側「雀仔公園」という緑豊かな公園に移転し、1997年末より営業が再開しました。雀仔街の跡地には2004年秋、香港最大級の複合施設「ランガム・プレイス」が誕生。街には若者たちであふれ、21世紀にふさわしい街として生まれ変わりました。

今後、香港は中国大陸との関係がさらに深まり、この街はさらなる変化を続けるでしょう。この写真集が『伝説の街・雀仔街』の語り部となってくれることを心から願っています。〔出版：新風舎　ISBN978-4-289-02639-5〕　**写真家　永田幸子**

目　　次

2007年12月発行

日中経済貿易における香港の掛け橋的役割
　日本企業から見る香港の優位性 …… 2・3
日本の街を彩る香港企業
　フォトビションジャパン株式会社 …… 4・5
中国人と日本人に特化した人材紹介会社 …… 5
第8回「香港フォーラム」開催さる！ …… 6・7
支部便り　関西
　香港フォーラム2007及びプレミアムコネクト体験 …… 8
　香港返還10周年特別記念講演会 …… 9
支部便り　中京
　名古屋港開港100周年記念・名古屋港水族館開館15周年記念
　会員懇談会開催 …… 10
支部便り　福岡
　香港視察報告 …… 11
支部便り　山形
　奥羽山岳信仰の原点・出羽三山と龍山 …… 12
香港便り　「激しさを増す香港と周辺空港の旅客争奪戦」 …… 12
支部便り　北海道
　香港食品販路開拓セミナーおよび現地調査ミッション開催報告 …… 13
支部便り　宮城
　食関連ビジネス部会を設立／女性部会において第2回料理
　教室を開催／香港宮城県人会へ旗を寄贈 …… 14
コロンビア便り
　コロンビア・ボゴタの学校、教育 …… 15

日中経済貿易における香港の掛け橋的役割

日本企業から見る香港の優位性

日本香港協会　理事　　張　暁帆

世界主要都市中における香港の位置づけ

香港は税率が低く、政府の干渉も少ない有名な自由貿易港として世界に知られる。香港は米国のヘリテージ財団が主催する“世界経済自由ランキング”選考で、13年間連続第一位に選ばれてきた。それに香港は世界有数の金融及び情報センターでもある。一方、社団法人日本経済研究センターが世界の主要国家と地域に対して調査研究を行い、今後10年間の競争力を示す潜在競争力のランキングを作成した。その最新報告では、香港は第一位となった。2位はシンガポールで、米国は3位だった。

香港の経済構造と特徴

香港の総生産額及び総従業員数における比重で計算すれば、第一次産業が香港経済に占める比重は些かである。第二次産業が香港経済における比重は一時期大きかったが、80年代以後、製造業が珠江デルタ地域に移転した為、これらの業界の香港における比重は下がっている。一方、第三次産業が香港経済に占める割合は明らかに上昇している。2003年の統計によると、この数字は既に88％までに上昇している。近年、経済構造の転換に伴い、情報産業の成長は著しい。香港の固定電話、移動電話、インターネットの普及率は既に世界のトップクラスに入っている。科学技術開発に関連する施設は多数あり、特に香港科技園はよく知られている。

国際ビジネスハブとして香港のメリット

1. 重要な地理的位置

香港は中国大陸南端に位置し、北は広い華南地域、南は資源豊かな南シナ海に面している。太平洋とインド洋間航路に連接する重要な中継所である。そして飛行機で4～5時間があれば香港からアジア各主要都市に到着可能である。

2. 香港法律制度の優位性

香港は1841年から自由貿易港制度を実行している。この制度は免税港制度、低い所得税制度、政府が外国投資、外貨、貿易など経済活動に対する干渉は最小限にすることを定めている。1997年に香港の主権が中国に返還された後も自由貿易港制度は留保された。

香港の法律は透明性が良く、それにより経済活動は展開しやすい。香港で実行されている商法はイギリス連邦の商法である。日本の法律にも比較的に近いところがある。

香港の法律に基づいて仲裁を行い、その結論がイギリス連邦加盟国・地域は勿論、仲裁に関する国際条約ニューヨーク条約の加盟国である中国大陸でも認められるというものがある。臨時仲裁も利用できる。

税金面では中国又は日本国内より香港の方が遥かに有利である。全般に低税率で税金の種類も少なく、事業税や住民税も一切ありません。法人税は17.5％で、香港を源泉とする所得に対してのみ課税されるという特徴を持っている。

その上に、2004年以後CEPA制度により中国主要都市が三段階に分けて香港製品に対する輸入関税を撤廃し、香港企業に対する参入規制も緩和した。中国内陸で投資する予定のある会社は、香港で現地法人をつくりCEPAの特典制度を利用して中国内陸に進出した方が有利である。CEPA制度により香港に投資した日本企業が、一定の条件に達してから、香港企業として中国内地市場に入り、ゼロ関税優遇を受ける。

3. 香港サービス業の優位性

サービス業の香港経済に占める割合は大きい。そのうち貿易物流、金融などの業界は世界中で知られている。航空貨物取扱量と海上貨物取扱量は世界第一と第二位である。市場価格では、香港の証券市場はアジア第2位の証券市場である。近年、中国大陸企業は香港証券市場に続々と上場している。2006年上半期（1－6月）の初回発行証券（IPO）の金額は148億ドルに達し、ニューヨーク証券市場のIPOの取引金額を上回って、ロンドンに続き、世界第2位になった。為替取引の成約額では、香港外国為替取引市場は世界の第6番目に大きい取引市場でもある。法律、会計コンサルタント業、製品設計、広告業、生産管理や営業サービスなどの業界は高い専門知識と強い競争能力を持っている。香港では世界中からの金融、貿易、物流、生産管理などの経験者は集っている。これらの経験者は香港の重要な人材資源である。発達したサービス産業は外資誘致に有利である。香港のサービス業を利用する日本企業も増えている。

4. ビジネスネットワーク

1）中国内陸との連携：香港では多数の内陸企業が上場している。中国内陸各地政府機関、企業は香港で連絡事務所、支店などの形で駐在員を派遣している。従って香港に居ながらも中国内陸各地と連携を取れる。

2）海外との連携：歴史上の理由で香港は英連邦など英語圏国との関係は深い。今でも様々イベントを通してこの連携を強化している。例えば年一回行われる香港フォーラム期間中、世界中の香港協会メンバーが香港で集って、交流を行う。英語圏の参加者が多いが日本からの参加者も少なくない。毎年、百数十人の代表団を派遣しています。

3）華僑のネットワーク：有利なビジネス環境と人文環境で多くの華人企業は香港をビジネス拠点として活用している。ですから香港に居ながら世界各地の華人企業家と接触する機会がある。華僑のネットワークを活用することも可能である。以前華

張　暁帆氏

僑企業は家族企業というイメージがあったが現在新世代華人企業経営者は殆ど欧米の教育を受け、近代的な管理手法を導入している。日本企業も学ぶ所が多いと日本企業の経営者からよく聞きました。

5. 国際化の都市

香港は東洋のニューヨークとも言われた。英語は香港の公用言語の一つであり、国際ビジネスルールが通用する。生活面も便利である。日本企業やビジネスマンにとって比較的適応しやすく、便利に感じる国際都会である。

6. 周辺市場の優位性

珠江デルタ地域（PRD）は既に世界の電子、情報通信機器、自動車の製造センターになっており、同時に一大消費市場でもある。広州など華南地域の重工業化に伴い、様々なニーズが増えるのも予想される。

CEPA制度、汎珠江デルタ地域Pan—PRD協定の展開により、華南地域は一大市場になるのは間違いない。

中国市場だけではなく、アジア市場全体のアクセスも便利である。

日中経済貿易における香港の役割

前述のいろいろな優位性により、香港は、自然に中国と日本を含む国際市場を連接する中継所となった。中継貿易の目的地別で計算すると2005年では、香港経由中国内陸向けの貨物中に、中国国内製品の逆輸入を除いて、日本製品が占めた割合は25％であって、首位となった。香港経由日本向けの貨物の中、中国国内製品が占めた割合は92％であって、一位となった。中国経済の成長に伴い、対外貿易は増える一方である。WTOの統計により、2004年中国の輸出入、貿易総額は既に世界第三位となった。そして中国の市場規模、特に華南市場の成長性を考慮して、今後香港の貿易中継所としての将来性は大きく期待されている。

投資面においては、外資系企業は香港を通じて、中国内陸の投資環境と市場を理解し、そして香港支社を通じて投資と輸出入業務を行っている。2006年の統計数字により、既に3845社の外国企業は香港で地域統括本部又は支社を設立した。そのうち731社は日本企業でした。一方、多くの中国内陸企業は香港で支社を設立し、そこで国際市場とビジネスルールを理解し、ビジネス計画、資金調達及び人脈準備を完成する。2004年の統計数字により、香港IPOの76％は中国内陸上場企業によるものである。従って、香港は外国投資家および中国内陸投資家の中継所になって掛け橋的役割を果たしている。この掛け橋的役割はCEPAの実行に伴い、拡大し続けることが期待できる。日本企業にとっては、香港を足掛かりとして活用し、香港を通じて中国内陸に進出するのが正しい選択肢である。

如何に香港の掛け橋的役割とメリットを活用するべきか

1. 香港貿易発展局と日本香港協会の資源を十分活用すること。香港貿易発展局又はその他香港駐日機関ではセミナー、アドバイス、刊行物、調査レポード、視察ミッション、展示会案内、企業データベースによる引き合い、マッチング、電子商取引などのビジネスサービスが利用できる。香港貿易発展局は東京、大阪などの主要都市に支所があり、関連団体である日本香港協会も日本の各大都市に支部がある。香港と中国ビジネスに関心を持つ方にとっては恵まれている環境と言える。
2. 香港を経て中国市場を含めた国際市場に入ること。具体的方法様々有ります。例えば香港で貿易会社を設立して多国間貿易を行う。又は香港で投資持株会社を作って香港経由中国内陸に投資する。また、香港貿易発展局が紹介した会社を代理として活用することである。
3. 香港国際都市のメリットを生かし、香港のビジネスネットワーク資源を活用し、中国市場及びその他国際市場に参入する。
4. 中国の政府部門及び研究機関と連携し、中国の経済計画や香港に関する政策動向などに注意を払うべきである。中国国務院香港マカオ研究所が出版した香港マカオ経済年鑑は公式な出版物である。重要な参考文献と思われる。
5. 対中ビジネスがスムーズに展開する為、日本、中国事情及び国際ビジネスルールを分かる管理人材を確保する必要がある。

参考資料：

○香港・マカオ経済年鑑（2005年版）、香港・マカオ経済年鑑社。
○関浣非“一国両制度下香港経済成長に関する研究”、三聯書店
○“大珠江三角州の国際競争力を高める為の研究”中山大学出版社
○“原産地規則とCEPA実用知識ハンドブック”中国税関出版社
○“日本企業対中投資の多様化”Nikkei Business 2006年4月17日
○“香港トレーダニュース”香港貿易発展局
○Hong Kong Liner 2007年2月号　香港経済貿易代表部（東京）
○経済貿易緊密化協定（CEPAII＆III）香港貿易発展局、香港経済貿易代表部

——日本の街を彩る香港企業——

フォトビションジャパン株式会社

皆さんは有名海外ブランドなどの大型広告看板を企画制作、さらに取り付けまで一貫して行っている香港資本の会社が日本にあることをご存知でしょうか。その会社「フォトビションジャパン株式会社」は写真出力機や超大型プリンターを駆使して広告用ビジュアルを製作しています。9月25日、同社社長ロバート・ラム氏より日本での事業成功の秘訣について聞く機会を得ました。

——日本での事業はどのようにスタートされたのですか

日本での事業展開の話が出た時、私はすでに香港の会社（Robertlam Color）の事業内容を古いスタイルの現像所から最新の大型プリント制作会社へ転換していました。業績は好調で多くの事業運営ノウハウも蓄積できました。2000年に日本でアナログ技術中心に運営していた現像所を買い取り、マシンを最新型に切り替えフルデジタルの大型プリント製作会社として再スタートさせました。旧会社社員のほとんどが新しい会社に参加してくれたのは非常に幸運でした。

——具体的な事業内容について教えてください。

現在、屋外広告、店舗ディスプレイ、展示会などで利用されている広告物製作が中心となっています。屋外広告ではインクジェットプリントを利用した大型看板の需要が増えています。インクジェットプリントはネオンサインなどと比べて表現の自由度が高くなります。我社では最大出力幅5mの超大型インクジェットプリンターをはじめ、最新の生産設備を備えることで多くのお客様の要望に応えています。店舗ディスプレイの分野では従来からあるポスタータイプ、ライトボックスタイプだけでなくシースルーのような新素材も扱っています。お客様が間近で見るこの種のディスプレイでは、グラフィックの綺麗さ、仕上がりの丁寧さが大切です。我々は、多種のプロ用インクジェットプリンターはもちろん、より高画質な印画紙タイプの出力機（1.8m幅）まで用意しています。また展示会で使用する横断幕、フラッグ、パネル等のグラフィック全般の製作も行っています。フォトビションジャパンの所在地である新木場は、東京近郊の主要展示会場である東京ビックサイト、幕張メッセ、国際フォーラムとのアクセスも良好です。

——日本で事業を成功させた秘訣を教えてください。

我社は100％香港資本で運営されていますが、社員のほとんどは日本人です。事業を日本で展開していくにあたり、私はまず日本語の勉強から始めました。日本語のレッスンを通じて日本人の心の一端を感じることが出来ます。私は日本人の考え方を理解し、その上で日本のやり方を尊重して指示を出すことに心がけました。私が社員に近づこうと一歩踏み出せば、社員も私に近づいてきてくれます。社長と社員の間には同じターゲットを共有しているという想い、ハーモニーが必要です。

——日本と香港と共通する事柄はありますか。

会社である以上利益を追求すること。この点が香港に

新木場スタジオ

おいても日本においても共通する最も重要な点です。社員とその家族は会社を中心に集まった大きな家族であるといえます。会社が安定していれば、家族は幸せになれます。それには社員全員で利益をあげようという意識を持ち続けることが重要です。私は会社経営に必要な分以上の利益は社員に還元したいと考えています。社員も豊かになって欲しいのです。今は香港、日本とほとんど別々に活動していますが、二つの都市での仕事が関連しあい、やがてひとつの大きなストーリー（Tale of two cities）が出来上がればすばらしいと考えています。

——多趣味であるとお聞きしましたが、どのような余暇を過ごしていますか

私は多くのことに興味を持っています。会社の入り口にバイク（ハーレーダビットソン）が2台停まっているのでお分かりのようにツーリングも私の趣味のひとつです。日本でも多くの大切な友人とツーリングを楽しんでいます。また香港ではボート（定員20名）も所有し週末にはセーリングを楽しみます。お客様を招いてボートでパーティーを行うこともあります。ボートは、私が内、外装デザインを行い、調度品も全て自分で選びました。人生には常にデザインが必要です。自分のテイストにこだわり毎日を過ごすのは楽しいことですし、人生をデザインしていくことは今のこの仕事に大きなプラスとなっています。

——今後の展開について教えてください。

私たちの会社が販売しているものは確実に変わってきています。以前は大型看板や電飾フィルムなどハードを売ることが中心でしたが、現在はそれらを通じて「マーケティングイメージ」を提供するようになっています。その製品のより良いイメージをお客様の意識にしっかり植えつけるソフト面でのお手伝いを始めています。今後はますます「イメージ」を売るという考え方が重要になります。従来のやり方にとらわれず様々な製品や方法を通じて「イメージ」を売ること。それが今後の我々の商売の中心になって来ることでしょう。広告業界は常に大きな変化の波にさらされています。他社よりも一歩先を歩いていくことが私たちに幸運を与えてくれると思っています。

ロバート・ラム氏　プロフィール
マカオ生まれ、香港育ち。18歳でヨーロッパへ渡りパリでビジュアルアーツを学ぶ。フォトグラファーとして成功した後、香港で写真の現像所を創設するなどビジネスの世界へ転進。2000年より日本においても事業を展開する。

フォトビションジャパン株式会社
〒136-0082　東京都江東区新木場1-6-26
代表取締役：ロバート・ラム
事業開始日：2000年6月13日
資　本　金：1億1000万円
従業員数：54名（2007年5月現在）
http://www.photobition.co.jp

ロバート・ラム氏（中央）と日本人スタッフ

中国人と日本人に特化した人材紹介会社

日本香港協会理事　井上一幸氏が「週刊ダイヤモンド」9月15日号のコラム「転→展→転職」に掲載されましたので、ご紹介します。

「日本に精通した中国人をもっと日本企業に紹介したい」

2006年秋、井上一幸さんは、中国人と日本人に特化した人材紹介会社「グッドジョブ　クリエーションズ」を立ち上げた。

大手から中小企業まで営業して歩く一方、中国人スタッフと二人三脚で求職者を募集している。求職者との面談には、独自の面談シートを使用。その人の持つスキルのほか、「しぐさ」や「表情」などのコミュニケーション力もチェックし、面談に時間をかける。

井上さんは以前、生命保険会社で株式の運用を担当していた。米国企業に出向したのが縁で米国の大学院で学び、航空会社に転職したが、「9・11同時多発テロ」の影響もあり帰国した。その後、在日の香港経済貿易代表部で、日本企業の対香港投資を担当した。

「外国人と仕事をしていると日本に対して誤解している人が多いものの、その一方で日本が大好きな外国人は多いことを知った。もっと日本のよさを理解してもらえる機会はないか」

そう考えたのが人材紹介会社を始めるきっかけに。自営業の父親の背中を見てきたこともあり、四十代を目前にして、自分で道を切り開こうと考えた。

前職で中国人と太いパイプができたことから、中国関係の仕事に就きたい日本人や日本で働きたい中国人への紹介、留学生の日本での就職支援の3つを事業の柱に据えた。当初は面接のコツもわからなかったが、優秀な中国人のバイタリティに触発され、体当たりで仕事を身につけた。

抱負を熱く語る井上一幸氏

井上さんが紹介する人材の「売り」は「日本の感性に合う人」だ。マナーや敬語だけでなく、真に日本社会や文化を理解でき、なじめる人材かどうかを見極める。ターゲットとしているのは日本人と同様に働ける文系のホワイトカラー人材だ。技術職に比べ、能力を見極めるのは難しいが、井上さんは納得がいくまで人材と向き合い、コミュニケーションを取る。

追い風も吹いてきた。入国管理局の統計によると、日本企業への就職を目的に在留資格を変更した留学生は年々増えているという。人材不足の日本で働きたい外国人は確実に増えているのだ。同社の登録者数も、年で約600人にまで拡大した。

「これから、1人でも多くの日本ファンを増やしていきたい」

中国と日本――。井上さんが結んだ小さな糸の結び目は、次第に太く、強くなりつつある。

飛龍　No.57　2007年12月発行　（禁無断転載）
日本香港協会　広報委員会
香港貿易発展局東京事務所内
〒102-0083　東京都千代田区麹町3-4　トラスティ麹町ビル6階
電話（03）5210-5870　FAX（03）5210-5860

関西日本香港協会
〒541-0052　大阪市中央区安土町2-3-13
大阪国際ビルディング10階　香港貿易発展局内　電話（06）4705-7030

中京日本香港協会
香港貿易発展局大阪事務所気付
〒541-0052　大阪市中央区安土町2-3-13
大阪国際ビルディング10階　香港貿易発展局内　電話（06）4705-7030

北九州支部
〒802-8522　北九州市小倉北区紺屋町13-1
北九州商工会議所　国際部内　電話（093）541-0181

福岡支部
〒810-0013　福岡市中央区大宮2-3-7
協同組合福岡情報ビジネス内　電話（092）534-6331

山形日本香港協会
〒990-2432　山形市荒楯町1丁目14番21号
（株）日本不動産コンサルティング内　電話（023）633-2110

北海道日本香港協会
〒060-8661　札幌市中央区大通西3-11　北洋銀行国際部内
電話（011）261-4288　FAX（011）232-6921

宮城日本香港協会
〒980-0811　仙台市青葉区一番町3-7-23　明治安田生命仙台一番町ビル3階
（株）JTB東北　交流文化事業部内
電話（022）212-5552　FAX（022）212-5556

URL　http://www.jhks.gr.jp

第8回「香港フォーラム」開催さる!

香港ビジネス協会世界連盟 (Federation of Hong Kong Business Association Worldwide／本部＝香港貿易発展局内）の世界大会に当たる「香港フォーラム」は、2007年度で第8回目を迎えました。

本年度は、10月8日～9日の2日間（オプショナル・プログラムが7日と10日)、香港コンベンション＆エキシビション・センターにて全世界23ヶ国の31のビジネス協会から約400名の会員が参加し、大盛況のうちに幕を閉じました。

今年度のフォーラムは、「Connecting China and the World through Hong Kong」をスローガンとして掲げ、世界中のメンバー間及び香港企業とのネットワーキングにスポットを当てて開催されました。

香港フォーラム会場風景

日本香港協会からは、本部（東京)、関西支部、中京支部、福岡支部、北海道支部、宮城支部の合計6団体からミッションの派遣があり、総勢80余名のメンバーが香港で一堂に会しました。

昨年度に続き、フォーラム開催前夜に当たる7日の夜には、「本部支部交流会」が開かれました。本年度は福岡支部が幹事役となり、台風の影響によるフライト遅延もありましたが、約70名の出席者を数えるなど、昨年度を上回る盛会となりました。各支部より本年度（上半期）のレビューと次年度の活動計画の説明があった後、美味しい本場の広東料理に舌鼓を打ちながら、本・支部の枠を超えたメンバー同士の交流が積極的に行われました。また、新たに香港支部設立に向け、現地からゲストメンバーも参加、今後は海を越えて、協会活動の更なる活性化が期待されます。

本部支部交流会集合写真

来年度は、持ち回りということで北海道支部が幹事役と決まり、参加メンバー一同再会を約束して散会となりました。

香港フォーラム開催期間中の2日間は、例年どおり豊富で魅力あるプログラムが多数催されました。連盟の世界総会、役員会を始め、地域別のミーティング、香港を拠点とする実業家や起業家によるパネルディスカッション、ネットワーキングセッション、昼食講演会、各種レセプション、香港名所や企業訪問等のオプショナルツアーと、多岐に亘るプログラムから、メンバーは自分の興味のあるものを適宜選択して参加することができました。

今年は、これまでとは違い「世界中小企業エキスポ」との共催がなく、フォーラム期間中に大型見本市の見学をすることはできませんでしたが、その分フォーラムメンバー専用のプログラムが充実していたのではないかと思います。

日本香港協会の会員になりますと、自動的に世界連盟のメンバーとして登録され、毎年当該フォーラムへ参加する権利を有することになるわけですが、フォーラムを「国際的ネットワーキングのプラットフォーム」として捉えれば、香港を通じてビジネスを拡大したいと考えている人にとって、世界連盟のメンバーとなることによるメリットが大きいことを再確認、本部・支部ともに会員数増強に当たっては、「香港フォーラム」の価値を広く、正しく伝達することの必要性を感じました。

フォーラムの初日（8日）は、香港貿易発展局フレデリック·ラム総裁による歓迎の辞に始まり、香港ビジネス協会世界連盟バリー·マクドナルド会長の開会の挨拶を経て、「中国ビジネス成功の秘訣」、「競争が激化する中国市場の見通し」をテーマとした、著名実業家・起業家によるパネル·ディスカッションが実施

香港フォーラム会議風景

されました。

Q＆Aセッションも活発で、世界各国の代表からの質問が相次ぐなど時間が短く感じられるほどでした。同日昼には、香港貿易発展局の新会長ジャック・ソー氏主催による昼食講演会が開催されました。香港貿易発展局の総裁を経て、MTR（地鉄公司）、PCCWのトップを勤めたソー氏は本年10月1日より会長に就任、本フォーラムが初の公務となりました。熱のこもったプレゼンテーションは参加者から大好評で、終了後はスタンディングオベーションで拍手が鳴り止みませんでした。

香港貿易発展局会長ジャック・ソー氏挨拶

昼食講演会の場におきましては、世界各国のビジネス協会の年間を通じた活動を表彰する「Outstanding Initiative Award」の発表も行われましたが、残念ながら本年は日本勢は無冠に終わりました。日本の協会としても、来年に向けて、より一層ビジネスに密着した活動を強化する必要を感じました。

午後のセッションでは、アワード受賞者のプレゼンテーションが成功事例の共有として次々と行われ、アメリカ・カナダ・オーストラリアを始めとする欧米勢の面々が熱弁をふるいました。

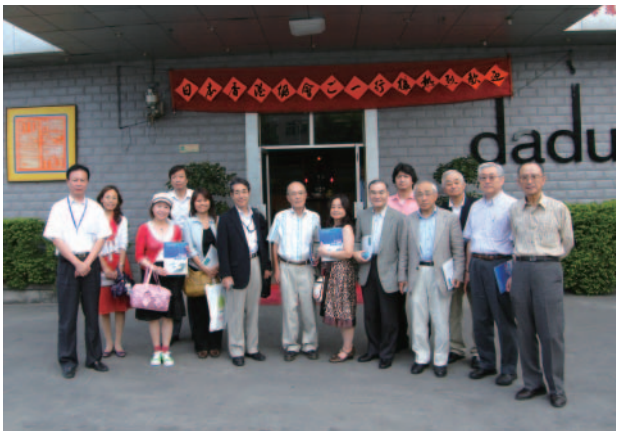
初日の夜は、参加者全員参加によるネットワーキング・カクテルレセプションが開催され、国際色豊かな交流の場となりました。

2日目（9日）は、午前中に全世界規模の役員会・理事会があり、財前理事長と戒田理事・事務局長（関西日本香港協会）が日本代表として出席されました。

同日の昼には、香港特別行政区政府政務長官であるヘンリー・タン氏主催の昼食講演会が、また夜には、船上クルージングによるフェアウェル・パーティーがそれぞれ盛大に開催され、世界中から集まった多数の参加者が出席、交流を深めました。

フェアウェルディナー

公式行事終了後の10日には、オプショナルプログラムとして企画された深圳の視察ツアーに11名のメンバーが参加致しました。



大都商会訪問集合写真「熱烈歓迎」

今回の深圳視察ツアーでは、目覚しい成長を遂げている塩田国際コンテナターミナルと保税区、および、資源リサイクルに取り組む株式会社大都商会を訪問させていただきました。

塩田国際ターミナルは世界第4位の取扱いを誇り、中国最大の輸出都市「深圳」全体の約半分の貨物は、このターミナルで取り扱われています。取扱高世界一の香港のコンテナターミナルとの関係は、コンテナ単位は香港で、船単位の貨物は塩田というように棲み分けができているとのことでした。

大都商会（dadu）は、1992年に東京で設立、石材の生産・販売事業を行ってきましたが、95年に深圳市に現地法人を設立して、プラスチックのリサイクル、再生加工販売事業をスタートしました。深圳には二つの工場があり、日本全国から買い付けた廃棄プラスチックを選別―粉砕―再生のプロセスでペレット化し、再生原料として販売するとともに、同社の深圳にある玩具工場においても、プラスチックの玩具を製造して、アメリカ、ヨーロッパ、日本等世界各国に輸出を行っています。見学したラインでは、丁度、アメリカ向けのクリスマス用商品が作られているところでした。

中国の飛躍的な成長を、現場から視察する価値あるツアーとなりました。

＊

なお、本年度の香港フォーラムの詳細につきましては、香港ビジネス協会世界連盟のウェブサイト http://www.hkfederation.org.hk 及びその中の第8回「香港フォーラム」専用サイト http://www.hkfederation.org.hk/forum/forum2007/main/index.asp でもご覧いただけますので、ご参照下さい。

KANSAI

支部便り

香港フォーラム2007及びプレミアムコネクト体験

関西日本香港協会　会員　　江畑　武彌
（株式会社ピアレス　代表取締役）

今回はじめて香港フォーラムに参加して実り多い成果がありましたので記憶のフレッシュなうちに感想を述べさせて頂きます。香港貿易発展局大阪事務所には長年にわたりビジネスマッチグサービスをはじめ香港/華南地区環境ビジネス、自動車部品ビジネス視察ツアーに参加、チャイニーズ・マネジメント＆マーケティング・スクール（CMMS）では二期に亘り受講し、その他多くの恩恵を受けて来ました。文字通り、勉強、情報、経験、人脈を通して2005年から香港経由中国向けビジネスをスロースタートしたところです。

現状に満足することなくより高度で効率的なビジネスを目指そうと考えておりました。おりしも今回の香港フォーラム2007へのお誘いがあり即参加させて頂きました。世界中から香港華人と香港となんらかの関係のあるビジネスパーソンが400人以上一堂に会するこの機会。従来は香港・中国ビジネス一商材の拡販を念頭にしたレベルでしか見ていなかったのを、異なる視点から見ればもっと大きなビジネスチャンスがあるのではないかとの期待を込めて参加致しました。

10月7日香港到着の夕方に日本香港協会本支部交流会と親睦会、8日、9日両日はフォーラムの全体会議では、香港貿易発展局の総裁、香港ビジネス協議会会長の挨拶、香港特別行政区政府政務長官の流暢な英語の基調講演は香港の近年の発展の成果を強調され、今後更なる発展が約束されているとの自信に満ち溢れた力強い講演でした。競争があればこそ発展があると積極的なビジネスの理念、これこそが華人の真髄なのでしょう。香港・中国でのビジネスに成功しているビジネスパーソンのパネルデイスカッショでも自信と余裕を持って語られたのが印象的でした。ビジネスにはリスクは必ずあるが、最小限にとどめながらチャレンジしないとチャンスはないと。決断とスピードが必要とのこと。要は即行動、即実行が華人にとってはごく当たり前の様です。

昼食会、晩餐会、カクテルレセプション、ワークショップ、立ち話にいたるまで、会う方はすべて積極的に名刺交換されており、私も負けまいと50名以上の方と交換しました。これらの方々とは近き将来なんらかの意味でコンタクトパーソンになるかもしれません。

フォーラムの運営も多額の費用を掛けているようです。すべての行事も時間通りで、スマートな運営でした。最終日のフェアーウエルパーティーはピンクパンサーのような派手な彩色の大型フェリーをチャーターして、テーブルでの豪華な晩餐でした。8時になれば恒例の香港島、九龍の双方からレーザーカクテルショーで楽しませてくれました。船のデッキで、Are you from Japan ?とヘッドハンテイングの名刺を持った人に声を掛けられました。

フォーラムといっても、友好、親睦のみに止まらず、すべてにおいてビジネス第一、ビジネス最優先が結論です。これこそ香港華人を中心とした香港フォーラムのこころ意気と意義があるのではとの感想です。

オーストラリア、アジア地区幹部会議で、会員増強問題の議論がありました。

日本の香港協会でも、協会から会員へbenefit（business chance）を積極的に開示、伝達、継承され、そのbenefit を頂いた会員は協会へ積極的フィードバックする。小規模でもこの様なグループセミナーを開催すれば積極的でアクテイブな新規会員の増強になるのではないかと思いつきました。

さて、今回香港フォーラム期間中にプレミアムコネクト（PREMIER CONNECT）というビジネスマッチングサービスがあるとの事前連絡を頂き9月初めに申し込みました。有料ですが《フォーラム期間中特別割引の格安料金》で4週間の事前調査期間が条件でした。

現在私が進めている工業用洗浄剤を香港経由中国市場向けに拡販するための申し込みをしました。10万社以上の膨大な企業データーベースから、検索と選択された会社の事前調査、そして商談の意思確認をして頂いて三社の候補会社との商談会を準備して頂きました。

10月9日に香港貿易発展局の37Fの特別ミーテイングルームで二社との商談会が実現しました。それぞれ、会社の内容も申し分なく、人物も好感が持てましたので、迷うことなく取引しようと決断しました。現在ビジネスの進め方の詳細について意見交換しており、近々に取引が実現出来ると期待しています。残る一社は当日中国に出張中のため面会は出来ませんでしたが、事前にメール等で打ち合わせの上、大阪に来てくれるとのこと心待ちにしております。これら三社は香港貿易発展局のご紹介ということもあり、双方とも安心して商談出来ます。希望を申しますと、各社60分の時間内で説明と話しをせねばならないのでせめて90分ー120分の時間を頂きたい。双方とも目的意識が明確な上での面談ですから、緊張する雰囲気の中で効率的であったかも知れません。いずれに致しましても短時間での話し合いの内容をすべて記憶していることからも（後日自分用の議事録は作成しています）今までに経験したことの無い、すばらしい商談会でした。

このような素晴らしい出会いがあり、本当にラッキーでした。勿論これからは自己リスクで現実のビジネスとして確立していかねばなりませんが、大きな希望と夢が手に入りました。〈P9左下段に続く〉

香港返還10周年特別記念講演会

関西日本香港協会　理事（華人経営研究部長）
斎藤　治

香港返還10周年を記念し、関西日本香港協会と香港貿易発展局共催による特別記念講演会「中国発展の鍵を握る『進化する香港』」が、9月28日にヒルトン大阪で開かれた。

講師には、中国の民営企業研究の第一人者、中国人民大学の黄泰岩教授を迎えた。黄教授は協会が主催する華人経営塾、チャイニーズ・マネジメント＆マーケティング・スクール（略称CMMS）の講師であり、今回、講義のため北京から来られるのに合わせて、特別記念講演会が実現できた。

黄教授は山東省出身で、人民大学経済学部を卒業し、経済学博士を取得し、1992年から教授を務めている。アメリカの南カリフォルニア大学の客員教授、中国経済発展・改革研究院院長などを歴任、韓国の電機大手、LGの中国法人の社外取締役も務めている。

黄教授は、「中国民営企業の現状と香港」と題した講演を行った。民営企業について、2006年で中国のGDP（国内総生産）の45％を占め、外資を含めると、65％が非国有経済だと分析。国有企業が整理される一方で、民営企業に働く人が増加し、雇用に大きな役割を果たしていると報告した。

民営企業の経営の特徴としては、90％がオーナーと社長を兼ねており、家庭によって成り立ち、社長のトップダウンの経営をしていることを指摘した。

2004年に調査した時点では、オーナーは農民や労働者で、エリート層は、ほとんどいなかったが、2007年の調査では、「多くが政府で働いていた経験や国営企業の責任者であった」と質的に変化していることと述べた。

また、平均年収は18・6万元。少ないのは再生産に回している。郷鎮企業は規模が大きくなると、大都市部へ移る。

また、「香港抜きには民営企業の発展はない」と香港が重要な位置を占めていることを力説した。78年末に鄧小平の号令でスタートした中国の改革・開放路線により、最初に投資を率先して行ったのは、「自分たちの古里を良くしたい」と考えた香港を中心とした華僑であったことを説明。90年代半ばまでは、中国の安価な土地、賃金、資源を活用するために進出したが、現在ではサービス業、金融業が参入し、投資先も広東省中心から、上海、長江デルタへと移ってきていることを述べた。

黄教授が特に強調したのは、香港の仲介機能だ。西側の企業にとって中国の市場も、経営も分からず、躊躇しがちだが、香港を活用することで突破口が開ける。フランスの小売り大手、カルフールが、香港で3年勉強してから大陸に進出し、世界最大のウオールマートも中国では抜いたことを実例として報告した。

中国に進出する企業の多くが、香港を経由して大陸に進出し、製造した品物を香港を中継地として、輸出してきた時代が、香港返還後を一つの転換点として変化してきたことを指摘。「これからの香港の機能は、金融が中心となる。大陸の民営、国営、ベンチャー企業を金融面で支援することが一層重要になるだろう。中国企業の株式上場には、香港が果たす役割は大きい」と述べた。

香港経済の90％以上がサービス業であり、その潜在力は人材にあると強調した。これは中国で最も遅れている分野で、中国はサービス化を急いでいる。その理由として、深刻な公害を引き起こしている製造業から、サービス業への産業転換を図っていることなどの背景についても説明した。

黄教授は「証券会社、銀行、弁護士、会計士などサービス業は、香港を介して大陸に入るのが良い。出版、テレビ、映画といった文化産業も大陸では発展する」と香港からのサービス産業の進出が有望であることを繰り返し強調した。

また、中国政府が企業を積極的に海外に進出させ、グローバル経済の中で競争力を強めていこうとしている点に関して、「テストの場となっているのも香港だ」と述べ、「香港が力を付ければ、大陸も強くなる」とその重要性を強調した。

歓迎講演をした香港貿易発展局の古田茂美・日本首席代表も、香港の制度的強みに言及、黄教授の講演の内容とも表裏一体のものとなった。中国の発展にとって、香港は切り離すことができない重要な役割を再確認することができ、82人の参加者は熱心に最後まで耳を傾けていた。

〈P8から続く〉

本当にプレミアムな出会いを頂いて感謝の気持ちで一杯です。これからも香港経由《輸出、輸入、サービス業も含めて》のビジネスをお考えの行動力のあるアントレープレニュアーの方には一度このサービスをお試しになられる事をお勧め致します。

初めての香港フォーラム参加の興奮が冷めやらぬ今、プレミアムコネクトを活用して、大きなビジネスの可能性を手にしたこの喜びが薄れないように小文にしました。

CHUKYO 支部便り

中京支部

名古屋港開港100周年記念 名古屋港水族館開館15周年記念

会員懇談会開催

中京日本香港協会　理事　　大竹　正男

中京日本香港協会では、会員相互の親睦を深めるため、本年は名古屋港開港100周年および名古屋港水族館開館15周年という節目の年に鑑み、去る7月28日(土)名古屋港水族館の視察会、懇親パーティーを水族館内特別研修室において開催した。

当日は夏休みのこともあり、小学生5名、幼児11名、協会からは高橋会長ご夫妻をはじめ、計58名の参加があり、とくに、暑い名古屋人にとり、室内は大変居心地のいい環境のもとシャチ「クー」のパフォーマンス見学をメインに全員満足、楽しいひとときをすごし、成功裡に終了した。

名古屋港水族館特別室にてシャチの「クー」とご挨拶

また、パーティー後、水族館の3階スタジアムでは、シャチ「クー」のトレーニング、イルカのパフォーマンスを楽しむことができ、室内では、生まれたばかりのベルーガの赤ちゃん、「ピカチュウの海底大冒険またはミラクルダイナソー」のシネマ等を興味深く見学した。

ここで、開港100周年を迎えた名古屋港を紹介します。

歴史をひもとくと、ペリーの来航以来、開国が順次はじまり、再来年開港150周年を迎える横浜に遅れることおよそ50年、神戸港に遅れること40年、また、近隣の四日市港よりも遅く、日本で34番目の開港であった。

開港は遅れたが、「みなと」としての歴史は古く、名古屋港の起源は1601年、東海道53次の宿場町のひとつとして定められた、海陸の交通の要衝である「宮の渡し」まで遡ることができ、東海道で唯一の海上路で、桑名まで船で通行していました。

しかし、公式としては、名古屋港は1907年（明治40年）開港し、その後は発展を続け、現在では、物流、生産、交通、防災の各機能が備わった総合港湾として、中部のものづくり産業と旺盛な消費活動を支え、日本を代表する国際物流拠点としての地位をもつに至った。

とくに、近年では、名古屋港は世界に開く日本のゲートウェイとして、目覚しい発展ぶりであり、①5大港（他には、横浜、東京、神戸、大阪）における外貿貨物総取扱量は年間1億トンを超え、ダントツの1位である。―因みに、2005年では、名古屋港12,196万トンと2位の横浜港8,019万トンを引き離している。②名古屋港と世界とのネットワークもフルコンテナ船隻数が中国（香港含む）2,099と全体の42.7％を占め、北米、東南アジアと増大している。

さらに、貿易額は日本全体の約10％―具体的には、2005年の数字で全国約122兆円のうち当名古屋港は約12兆円、②貿易黒字額は全国の約59％―具体的には、2005年の数字で全国約8.7兆円のうち当名古屋港は約5.1兆円―で貿易額に比べてかなり大きな割合となっている。

一方、開館15周年を迎えた名古屋港水族館は、1992年南館設立に続いて、2001年11月には、北館がオープンした。南館は「南極への旅」をテーマに日本から南極までを5つの水域に分類、約450種3万点の生き物を紹介、北館は「35億年はるかな旅―ふたたび海にもどった動物たち」をテーマにベルーガ、シャチなど大型海洋哺乳動物が展示されている。

それに、先に会員一同、楽しむことができたアイマックスビジョンによるシアターや世界最大級のプールで繰り広げられる海の動物たちのダイナミックなパフォーマンスは今後とも水族館の売りとして大きく貢献していくと考えられる。

このような名古屋港の発展ぶりが多くの皆様の注目を浴び、魅了することになるのは確実といえよう。

名古屋港水族館にて理事・語学教室講師他

FUKUOKA
支部便り
福岡支部

香港視察報告

会員　　肥後　俊明

今年は、1997年に香港が英国から中国に返還されて10周年で、私は、この記念すべき年に初めて香港を訪れることになりました。出発当日は、数日前から気になっていた台風の影響で、飛行機の出発が2時間ほど遅れてしまいました。香港へは台北経由で、台北では約1時間のトランジットの間に一度飛行機から降りることができるとのことでしたが、都合により機内で待たなければなりませんでした。福岡から香港まで約5時間も禁煙しなければなりませんでしたので、煙草を吸われる方は、香港での一服がおいしかったのではないでしょうか。

以下、日本香港協会本部・支部交流会、香港福岡県人会と福岡支部との懇親会、香港フォーラムについて報告させていただきます。

日本香港協会本部・支部交流会

上述のとおり、香港到着が予定より遅れたことから、宿泊するホテルに行く前に、交流会の会場に向かいました。開会時間を調整していただいたものの、それでも開会予定の時間に遅れ、本部および各支部の皆さんには大変ご迷惑をお掛けしてしまい、申し訳ありませんでした。今回の交流会は、福岡支部が幹事支部でしたので、司会（大平）が焦っているところを、香港貿易発展局の伊東次長様にお手伝いをしていただいたとのことで有難うございました。

一方、到着するや否や当支部の並田会長の挨拶で開会しましたが、開会が遅れていたことから、並田会長も要点だけに短くまとめて話されておらました。

開会後、しばらくは食事する間もなく、各支部の方と名刺交換をさせていただきました。その後、各支部の活動報告及び事業計画についての報告を聞きながら、各支部の方々との交流をさせていただき、大変有意義な時間を楽しみました。

開会の挨拶をされる並田会長、手前は日本香港協会　財前理事長

香港福岡県人会と福岡支部との懇親会

第137回を数える香港福岡県人会の懇親会は、年に3、4回程開催しておられるとのことで、今回は、福岡支部の15名も加えていただき36名の参加でした。福岡支部のメンバーの中には、昨年まで香港福岡県人会に所属されていた方がおられたこともあり、和やかな感じがする中で、香港福岡県人会　緒方会長よりご挨拶をいただき開宴しました。

以前、福岡に住まわれていた辺りの話になると、懐かしんでおられるようでした。一方では食品についてやや高いものの日本産の野菜、果物、飲み物、肉、寿司等なんでもスーパーに揃っており、日本にいるかのようだとのことでした。特にビールは、日本産のものが輸送コストを含んでも3割ほど安いのには驚きました。

また、「今では香港の経済は上向いていますが、これもここ3、4年ぐらい前からとのことで、返還当初はいろいろと大変なこともありましたよ。」とにこやかに話されていたのが印象に残っています。

なお、10月28日からドラゴン航空による福岡直行便が就航しますので、これまで以上に香港との交流が深まるのではないかと思っています。

香港福岡県人会の方との集合写真

香港フォーラム

会場は、国際的な雰囲気がする中、進行役の方が日本を紹介されたとき、私達は軽く手を上げる程度でしたが、国によっては、「ウォー」と声を発しながら立ち上がるなど、このような場を楽しんでいるかのように見えました。

フォーラムでは、話の途中でジョークをうまく使いながら話されており、私もこの話し方のテクニックを参考にさせていただくことにしました。

また、昼食時には、各テーブルでは、食事しながら大きな声で会話をされており、これが国際的なコミュニケーションの取り方なのかと圧倒されるばかりでした。

YAMAGATA 山形支部

支部便り

奥羽山岳信仰の原点・出羽三山と龍山

日本香港協会山形支部　会長　　後藤　誠一

この度、再度日本香港協会山形支部の会長職を仰せつかりました。仙台支部、札幌支部等の東北、北海道の大都市から次々と協会に参画してくる中、山形支部も原点に立ち返り、新たな時代の流れの中で立ち後れずに頑張っていく所存でおりますので、改めて宜しくご指導をお願い申し上げます。

以前に山形支部のご紹介をした際には、山形市の観光資産として「蔵王」と「山寺」をご紹介いたしました。蔵王は世界に名を馳せるスキー場として、そして山寺は「芭蕉」の俳句や京都比叡山の御灯明が残る寺として有名でありますが、どちらの観光地も実は「山岳信仰」にその端を発しております。原始時代より人類は「山々」に偉大なる神々が住むところとして自然への驚異と共に崇めてきました。世界中の人々がその宗教とは別に山々への畏れと信仰を持ち続けてきたのです。

この日本においても、天皇家の始まりといわれる九州・高千穂への天孫降臨伝説に始まり、紀伊吉野・熊野古道にある山岳信仰、そして「陸奥・東北」地方の奥なる神秘の山々としての出羽三山信仰がありました。

出羽三山は「月山」「羽黒山」「湯殿山」の三つの連山を指し、今も平安時代より残る宿坊などを含め多くの遺産、史跡を残し全国からの参拝が絶えません。山伏姿の修験者は歌舞伎でも有名なものです。人間は少しでも神々の住む天上に近く昇っていきたいという願望があり、深い森に囲まれたその山々には得も知れぬ神秘が宿り続けて人々を引きつけるのです。

この山形の地には、その出羽三山信仰と同様に、多くの山岳信仰が根付いており、日本最古の石鳥居といわれている「鳥居ヶ丘遺跡」や、蔵王権現信仰に繋がる、西行法師が歌に詠んだ「龍山・滝の山」石鳥居遺跡が残っております。

この度日本香港協会の山形支部に入会されたリブネさんご夫妻は、こうした山岳信仰のふるさと山形の自然に大いに感動され、山形に住むことを決めたと言います。そしてその事が我々地元に住む者にとって何処かに置き忘れてきたかのような、ふるさとの持つ魅力を改めて再発見・再認識するきっかけともなりました。会員の活動として、そうした山々に登ってみようという運びとなっております。今、世界中が混沌とした世の中となっている中で、経済的な欲求もさることながら、精神的な「心」の満足・癒しが求められておるようです。環境問題が声高に叫ばれ、山々の持つ自然の神秘と魅力の再発見は、宮崎駿監督のアニメ「もののけ姫」にも表れておりました。奈良・平安の古くから人々の心を引きつけてきたみちのくの山岳信仰メッカへ是非おいでいただき、豊かな森林浴と共に、何か忘れてきたモノを見つけていただければ幸いと存じます。最後に、各支部の皆様方と共に、日本香港協会の益々の発展を祈念いたします。

香港便り

激しさを増す香港と周辺空港の旅客争奪戦

広報委員　　麻生　雍一郎

香港国際空港と周辺各都市の空港による旅客争奪戦が激しさを増している。深圳宝安国際空港はシンガポールのチャンギー国際空港と空港投資に係わる合弁事業契約を取り交わし、10月には両空港の運営会社が共同で「機場管理有限公司」を立ち上げた。中国各地の空港に対し空港管理、サービス、計画策定、事業推進などをアドバイスしていくという。

香港の関係者にとっては「これらのソフトとノウハウが一番優れているのは香港国際空港。それに香港、深圳は戦略提携して華南の発展を推進していこう、と言っていたのに、深圳はなぜ香港空港ではなく香港のライバル・シンガポール空港と組むのか？」と文句の一つも言いたい心境かもしれない。

深圳空港は9月には香港のマカオ・フェリーターミナルに、10月にはMTRの九龍駅にもそれぞれチェックインカウンターを設置、アクセスの改善に乗り出している。乗客だけではない。香港で印刷する日本の新聞なども以前は香港空港から中国各都市へ運んでいたのを今では深圳までトラックで運び、航空運送費の安い深圳空港からの中国国内便を使って輸送するやり方に切り替えている。

また、広州白雲空港もチケット購入や搭乗手続きができるシティエアターミナルを珠江デルタの各都市に設け、直通バスで空港まで運ぶサービスを強化している。このところ米ラスベガス資本を導入して変身著しいマカオは空港機能も一新、東南アジア向けの格安路線や日本の関西国際空港との間に毎週チャーター便を飛ばすなど、かって香港国際空港に集中していた海外からの貨客は、いまや周辺の各空港の争奪目標になってきた。

香港の特区政府、空港管理局には香港、深圳間を17分で行き来できる高速鉄道を敷き、両空港を事実上一体化し、香港空港を海外向け、深圳を中国本土内への専業空港とする構想も浮上しているが、深圳側が乗ってくるかどうか。華南圏全体の経済が拡大している今は、各空港がWin&Winの関係を維持することも可能だが、経済の流れが変わったり、2003年のSARS（重症急性呼吸器症候群）の時のように物流のパイが一挙に縮んだりした時、どうするのか。激しさを増す空港間の争いは大きな課題も残している。

香港視察報告

北海道日本香港協会では今年8月に、札幌商工会議所などと共催で香港食品販路開拓に関するセミナーと現地調査ミッションを開催いたしました。今回はその模様をご報告いたします。

香港食品販路開拓セミナー

8月6日(月)、札幌の北海道経済センターにおいて、香港貿易発展局・北海道日本香港協会・北洋銀行・札幌商工会議所・札幌市の主催で「香港食品販路開拓セミナー」を開催しました。当日は食品業界を中心に企業代表者など約50名が参加され、香港食品業界のバイヤーお二人に講演をいただきました。

まず、Mediafusion Creations Ltd.のLee Wai Kit氏から、「中国水産業界のプロフィールと日本企業のビジネスチャンスについて」と題して講演をいただきました。同氏は香港鮮魚業界のパイオニアとして知られ、中国水産科学アカデミーのリサーチフェローのほか、中国各有名大学の客員教授も務めている方です。この中で、中国の水産物輸入の原産国はロシアが38%と最上位を占め、日本はアメリカに次ぐ3位（6%）でうち半分は北海道産の秋鮭が占めている事、全体として日本企業は商品開発・加工技術・品質管理・養殖関連技術などの面で優位性がある事などお話しいただきました。

続いてTop Joiner（HONG KONG）Ltd.の伴有純氏による「香港外食市場における日本からの農水産品輸入動向」と題しての講演では、香港では北海道への関心がとても高く北海道観光との相乗効果や「食の安全」への関心の高まりなどから「北海道ブランド」の優位性が高まっており、上手に活用すべきとのアドバイスがありました。また、日本食向けの食材としてだけでは限界があり、ナマコ・貝柱・フカヒレのような中華料理の食材として認められるような取り組みも販路拡大には重要との事でした。

フードエキスポ2007の模様

香港販路開拓調査ミッション

前記セミナーでのお話をふまえ、北海道日本香港協会・北洋銀行・札幌商工会議所の主催で、香港・中国華南地区への食品販路開拓に関心のある企業代表者6名の参加により、8月19日(日)～23日(木)の日程で香港へ現地視察を行いました。(現在、札幌ー香港間の直行便はキャセイパシフィック航空で所要時間約5時間・週4便が運行中)

日程2日目には香港貿易発展局本部へ訪問し、香港の概況について説明を受けました。その中で貿易発展局側からは、中国本土へ進出する際の窓口としての香港の優位性（高度な金融機能、中国本土・香港経済緊密化協定＝CEPA締結による中国本土との経済一体化など）や香港自体の好調な経済状況について説明がありました。

その後、貿易発展局に隣接するコンベンションセンターで開催されていた「香港フードエキスポ2007」を視察しました。このフードエキスポは貿易発展局の主催で開かれ、世界各国から出展企業・バイヤーが集まる国際見本市です。会場は多数の香港市民で賑わい、香港人の食に対する関心の高さを実感する場でもありました。

フードエキスポの会場となった香港コンベンションセンター（写真中央）

3日目・4日目は、日系総合スーパーなどを視察しました。店内は日本の店舗と大差ない雰囲気で、日系スーパーだけあって食品売場は日本からの生鮮食料品や加工食品が数多く並んでいました。価格は日本の1.5～3倍ですが、日本人や欧米人以外にも現地の富裕層が購入するそうです。富裕層の間で日本製品の質の高さが評判となっており、地場製品の数倍の値段でも買い求めるとの事でした。中でも北海道産食品の人気が高く、あるスーパーでは北海道フェア開催の予定もありました。

今回参加された方々は、香港での北海道食品の可能性を感じ取られたようで、大変有意義な視察となりました。

MIYAGI 宮城支部

支部便り

食関連ビジネス部会を設立

昨年の11月宮城日本香港協会が発足し、友好を中心とした事業を推進してきましたが、時代が経済交流を求めていることを認識し、この会の発足となりました。

去る9月4日(火)に、日本香港協会の塚本事務局長をお迎えして設立総会を行い、県産品の輸出拡大や経済情報の交換などを積極的に行う旨の活動方針を確認いたしました。

食関連ビジネス部会

Four Seas GroupのDr. Stephenは、「香港市場を制覇したからといって中国大陸市場を制覇できると限らないが、香港市場を制さずして中国大陸市場を制覇することは不可能である」と言っております。中国の目覚しい経済発展の入り口に香港はあります。この部会の事業を通じて、県内にそのイメージを発信していきたいと思います。

部会の活動が、県が推進する「富県みやぎ」の一助となり、活力ある経済の再生が達成されれば幸いです。

女性部会において第2回料理教室を開催

当協会女性部会による第2回の料理教室を、去る10月16日(火)東北電力グリーンプラザIFクッキングスタジオにおいて開催しました。

女性部会　第2回料理教室①

専任講師による中華料理の料理講習会で、当日は17名の参加者があり、10時30分から、安全で快適な“電気の暮らしのお役立ち”としてIHクッキングヒーターの使い勝手を体験。各グループによる中華料理を4品作り、講師の先生2人から指導いただき、隣のグループと味くらべをしてお互い話し合いながら、なごやかにしかもスピーディーに料理をつくることができました。12時30分から自分が作った料理の感想を話し合いながら、彩りや栄養カロリーを考えた献立に満足でした。参加者は、下ごしらえなど工夫すれば、簡単に美味しく調理ができるとことを学びました。当協会事務局の(株)JTB菊池部長も参加し挨拶、また次回も企画して欲しいと参加者からの声も聞かれるなど大好評でした。四季おりおりの料理を、楽しみながら作る料理教室をまた企画し、多くの参加を呼びかけていきたいと思います。

女性部会　第2回料理教室②

香港宮城県人会へ旗を寄贈

去る10月7日(日)、当協会の小野寺事務局長が、香港で開催された日本香港協会の本部支部交流会に参加、その際、かねて香港の宮城県人会から要望されておりました「香港宮城県人会の旗」を持参し、翌8日(月)贈呈式を行いました。

県人会の鈴木会長からは、「ここに至る迄のいろいろのお骨折り、厚く御礼申し上げます。この旗の正式お披露目は、知事がおいでになる11月5日となります。当日、弊県人会との懇談会を、銅鑼湾の南北楼（四川料理）にて開催し、懇親を深めました。これからの双方の協力に対する基本姿勢や問題点など、いろいろなお話をすることが出来、たいへん有意義な時間となりました。今後も双方の発展に向けて微力では有りますが、努力してまいりますので、どうぞよろしくお願いいたします。」との暖かいお礼のメールが届きました。

当協会としても、現地の県人会と力を合わせ、香港との様々な交流を進めて参りたいと思います。

香港宮城県人会へ旗を寄贈

コロンビア便り

コロンビア・ボゴタの学校、教育

日本香港協会　在外理事　　細萱　恵子

国際協力機構の森林プロジェクトの専門家としてこちらコロンビア、ボゴタに赴任したのが、6月中旬で、1ヶ月ほどしてから、子供たちがそれぞれ試験を終えて、ボゴタにやって来ました。娘は高校2年生、息子は大学2年生です。娘は外国の高校を卒業すると、帰国子女入試を受けられるかも、という期待でこちらにやってきています。息子は最初、「アメリカやカナダならまだしもコロンビアなんて行って妹の人生を狂わせるよ」と言っていましたので、一人で下宿して大学に行かせるつもりでした。しかし、あれこれ準備しているうちに本人の気も変わり、半年くらい行ってみるかな、という気持ちから、1年くらいこちらの大学に留学してスペイン語を勉強しようかなという風に変わってきたようでした。

私も、若いときに海外で暮らすという経験は絶対に今後に生きると思うので、心境の変化は大歓迎です。英語なら話せる人は多いでしょうが、スペイン語も話せるというのは、今後の財産になると思うので、「スペイン語をマスターする」という点だけに目標を絞ってみたらと言っています。一年や二年卒業が遅れても長い人生にどうっていうこともないと思います。

とはいうものの、二人の学校探しは子供たちが来る前には全く手がつけられませんでした。学校が見つかるのかどうか見当もつかず、正直なところ不安もありました。また、私がボゴタに着いたのが当地の祝日3連休で、街中は閑散としていて、人っ子ひとり歩いていない、裏寂れた町に見えました。しばらくはこんな所に子供まで連れてくるなんて、果たして良いのだろうか、そのまま日本の学校に行かせた方が本人達にいいのかもしれない、と自分の判断に自信も持てない日々が続きました。今でも自信があるわけではありませんが、娘は何とかスペイン語と英語のバイリンガルスクールであるCOLEGIOに通い始めました。息子はスペイン語の特訓を受けて、1月からはこちらの大学に留学できるように準備しています。

子供たちの学校探しを通して得られたコロンビアの学校についての第一印象は、学校教育に対する親の熱意です。また学校側もそれだけの費用を取りますが、熱心に教えているようです。自宅アパートから歩いて30秒のところに、コロンビアで１、２を争う私立有名男子校Colegio Cervantesがあります。毎朝6時50分の始業のベルでちょうど目を覚ますことができます。始業時間が7時前というのはこちらでは当たり前のようです。普通学校へ通うのはスクールバスが一般的ですが、当地の国柄からか、玄関まで迎えに来て、玄関まで送ってくれますので、安心です。しかし、一軒一軒回るので、大体通学時間が1時間、１時間半は掛かりますので、5時半くらいには家を出ることになります。

ボゴタ北部の有名私立校

こちらの知人の息子さんはまだ5歳ですが、Kinder（幼稚園）の就学準備コースで朝6時半授業開始で3時半に帰宅です。2歳からInfantil、3歳でKinder（幼稚園）、5歳で小学校へ上がります。Kinderで早、居残り授業もあり、落第もあります。指示を受けたら親も一緒に夕方5時くらいから2時間3時間と補習に立ち会わなくてはなりません。親も大変ですが、それよりも先生の熱意には驚かされます。立ち会わせるのは、子供の教育は学校まかせではなく、親に責任がある、という考えからきているのではないかと思います。

Kinderから英語の授業もやっていて宿題もかなり出るようです。というのは、コロンビアではバイリンガル教育を国家の教育基本方針としていますので、英語教育の熱心さは大変なものです。Primaria(小学校)、Segundaria（中・高等学校）でも英語で授業するところも多いですので、英語の会話、聞き取り能力はかなり高いといえます。ただ、使っているテキストのレベルがそれほど高いとは思えず、日本の大学入試の英語読解のレベルはかなり高そうに思えます。

日本人で、日本の競争社会の中で子供を育てるのは可哀そうだ、といって当地に来た人がいましたが、日本のゆとり教育とは比較にならない密度が濃い授業です。日本の学校教育も親として身近に見てきましたが、詰め込み教育反対とか、ゆとり教育とか言っているうちに、10年後、20年後には日本は第三諸国に追いつかれるどころか、かなわないのではないかと感じます。

子供に自由に考えさせる、というのは、何も考えさせない、と同じことだ、最初に徹底的に基礎を教え込めば、あとは自分で考えることができるようになるのだ、というのがこちらで知り合った親の考え方でした。江戸時代の寺子屋、明治から第二次世界大戦までの日本の初等教育はそのような考え方だったかも知れません。論語をとにかく音読して覚えさせる、というのは理屈ではなく、たたきこんでからそれが血となり肉となって自分の哲学として生きてくるのだという考え方だと思います。

正直なところ、発展途上国のひとつであるコロンビアに来て、このような教育に対する熱気を感じるとは想像もしていませんでした。いや発展途上国だからこそかもしれませんが、基本的にコロンビアの民度の高さをいたるところで感じることができます。こちらで経験した学校事情は私立学校だけですが、公立学校の教育レベル、先生の質などについてはまた機会があればお知らせしたいと思います。

www.cathaypacific.co.jp

キャセイパシフィック航空グループは、日本ー香港を、ルート最多の週101便で。

冬期スケジュールより、キャセイパシフィック航空グループで

成田ー香港、毎日6便。

福岡ー香港、直行便※就航。毎日2便。

仙台ー香港、直行便就航。週3便。※

キャセイパシフィック航空グループは、日本の各主要都市から香港へ毎日出発。日本ー香港間ルート最多の週101便を運航しています。日本から香港へ、そしてその先の世界120都市へ。キャセイパシフィック航空グループで、快適＆スピーディーな空の旅をお楽しみください。皆様への感謝を込めて、抽選で101名様に無料航空券が当たるアンケート実施中（2007年12月31日まで）*。詳しくは キャセイ 検索

oneworld　Asia Miles　DRAGONAIR　CATHAY PACIFIC

Now you're really flying

※キャセイパシフィック航空の姉妹会社＝香港ドラゴン航空機材での運航。キャセイパシフィック航空とのコードシェア便となります。2007年11月1日より香港ドラゴン航空はワンワールド・アライアンスに加盟しました。香港ドラゴン航空は、Skytraxの調査で6年間連続"中国のベストエアライン"に選ばれました。 ＊無料航空券のお申し込みには、キャセイパシフィック航空のメールマガジンCXスペシャルズへの登録が必要となります。詳細は、www.cathaypacific.co.jpをご参照ください。 ●フライトスケジュールは、2007年10月28日から2008年3月29日までの冬期スケジュールのものとなります。